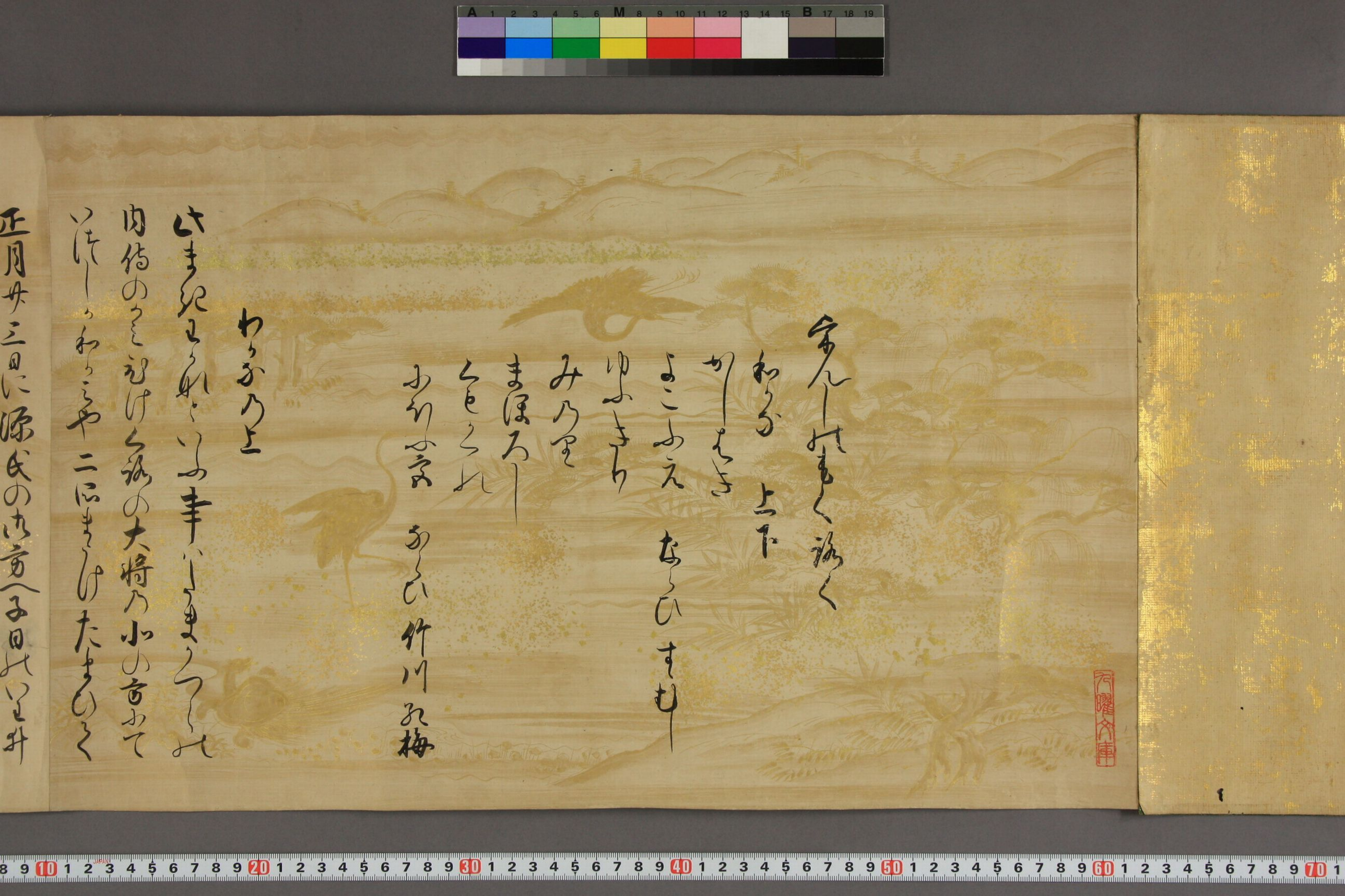

宗尺はまく流く
わらは　上下
かりたさ
よこかえ　ならひすむ
ゆふまより
みのを
まほろし
ムをられ
おりかえ　あひ竹川の梅

わらはの上

はまの手いまうつれ
内侍のつぼねの大将の小の音ふて
いたしわらはや二ほまひたまひく

正月廿三日に源氏の方へ子日ゆき

いはしのわたりや二位まいりけたまはりて

正月廿三日に源氏の中将へ子日せさせ給

かまの竹へそれおもふくはかりなく

めてたきことにおもへる女房

わか葉さす野への小松をひきつれて

もとゝせもなをいのちそふらん　弁

御返事六条院よりみさせ給ふ

二葉源氏のよそひは花を折てや

野辺の小松をひきとつむへ　家

ことよりあひそへのさたは源氏の中つきはれ

福よかくおりしていま井内へ上らるゝ

昔十七年よりの中にたらしかく御門

いみしき大かたの御なをかへるいはふきにし

おほくの一門一家の一大事はいかなる

天下の是よりて内侍のみなはるゝ子

わか竹ふ有をそへは子日よりまへておほし

御そかりし子日は聖徳にておもふなれ

をくここにうすふな事あり　古事ことよりなの

あつもみせと　仰らへし

梅壺四内侍さは君まらり給へいとあり

小弁ひまもらて意のくらくみならひあり

梅花咲ける内侍ちかき所へいとなむ
小松ひきてうゑしのくくみるひとの
はなさと源氏かめ竹かまと宜へ〜たが
うゑしなとなくなり内侍ハ年ハ千
あまとしるしうとのふまとまへ〜 梅
代表のうゑ祭に春宮と参りの
はすすしめハ宮すわたりて第文
生れのめくたり幸を見をあ
みうたり 入道ハていはうゑこ
はしらん代世のねひ今いみち也
もやみ山ともあらやて都へも小ハ
方へもこ海くくよ内ハ世人とも
いハ宮氏住吉ハあてたくをたら形文を
めもこにいまてくかしこめて毎日源
氏物語をくうゑ和かをみ新ちと
いふこと紙作りをれ此ほう懐へを海う
きんてみ宮家をかきう入たうよ
記ちいてんお所きちくなちよちう

いとうんよりゆめうちとう
なとよみく書の物語ハかきへうう
いかとゆめうちう付へ〜 明石のいと所
といふ所へ又其氏如三文と中し
の朱雀院の姫君ゆくおりますあう

[illegible]又其氏如三家と申し
の朱雀院の姫君おくおりますおまし
乃内井ふ院乃内いとおしこみて後のれな
やこれおもと拾あつひれんこ爾を
りて六条院の写千帝と年代伝之見て
氏長代下にうもきさいろんのこように
名ともかはる大ねうこ姫ひ人ちわ
いたまう源氏おはあひのみおとこ人あ
も若か殿に十おわくむこ殿くまふと
き祈えの

わか下　是いとなのいなれあきと

同しくく又此まに紀よ源氏せみすへ家を
竹ふひめきこ春宮代君海ふけまふと
明ふ作こうやあるてどうくに立ふ
内文の表文内くねよつを姫ふこれを
高しやくんの乃内ふよあておもせ伝乃
も位衣の内神のめくを涙くこりて
紫式上明石のと代母乃なりきせん女御
てんあとおはめ乃に記きつきて新わ
姫ひ又比を十月廿日夕ことを　姫乃あま
松ともふくたちあひうるくる乃
かく　神ち
そみれとんさ乃あと

松もしもふかくとたちかへりひとへくるれ
かくて　神さひ　もみれとも人きこのおもと
むきふしにて前のはゆのすこしかはりし
なふたみかさ海見舞ひてもろとちは思ひ
出まふ
んほく付へし梅も彼女三宮を
かゝきみ清もん乃こまかて思ひけるに
上乃春の宮思ほしなゝ六条院にて御ん
くまのおもしろきに此比す事のふてし
ほまかあり宮のうち殊にして給ひつく
らうもたてぬ孫こみをひきたてゝのし
みせてみ内へ入く丈けは宮もきちまゐり
孫このつまふてみまいあきみて清すゝ天へ
竹河毛々女三の立ちさまよひへたまふ清
おかしまう風まひとゝもつねよし宮ちまうて

いとつらくなりぬるに涙まじりに書きて
春の宮　御ふみ庭　たちはら
もやみたまひ　宮と有へし　梅清もんのゝ
此君のめ清水にきこえてかゝれし女房さ給
たまはりあまいとゝいよいよて文をつかいまゐらす
文のこゝろこゝろさしそかはしてかほに
ほゝして玉鬘よりひ地もひとしくあそしかき
なかすこきこえて思ひすゝぬ心ちしておか
はくあてとしいかにおほして　玉鬘にはしまい

はいすことゝて思ひまゐらぬかたちておは
しけるをかしいかゝおはし夕霧はほいなき
ゆめくらふ思ひいまし給ふ事ありて御覧じ
きめられくせおとゝつゐに御心をかけ給ふ
此の月の甚く紫の上にやことのひく
大将におもしけれともかんもすこしうけ給
み、ねんころにまゐらせはよろこひはゝかりておほき
そめしせやうて給はりわたりし給ふ光を
源氏の御子とかしつきてこひなやませ
まへそ家の上の大将さしはなせくみへ給ひん
御身かとにく御くらしそこしけれとも
ころや御さしく見らおほし給はくぬるをまし
さにこうとおもけれくめとおもふらし給
おはしませは紫のとこしなくこらにおとこし
こゝなくさめのふ様よいとあつまち此の夕を知
紫の上の御方へ御わたり給ひしぬるは女二宮のみな
これおほしや思ふ夕月まちてもとこに給はる
乃まへそ見まにもらんや思ひめすといとおしく
こゝ甚くそとてまゐり給ふ此のけんは本宮の
夕霧にはなれをくして月まちとく
ひとりわ給ふこら濃まゐらもあん
こゝはよきて給ふわ
甚くしく御わたり給はせすそ此の大将あらはし

甚人と御行すゑ宰相あら生
はらからいとかなしさにおさすみの
程へたまふ源氏のすまをおもひし
こつ給ふよ流されたる下にみとらめり
ためしをふかくあやしくこし
流されみなと流されし所まで見えぬまい
御とふへくもあらぬ宰相中将みて
うちはらにおひなりてさまかへん名
別さきとはらくとかなあらんかなしき文
源氏の流人のうちそいかかる有さまんせつ
かしかともちく東人なきをいきのみ乃かる
よわ京まなかし色かくしけふを見くまふ
何となくものこしくはなれさりちし
源氏帰り給ひて後宮よりひたまはいさ
みくいなき入まひ程よしとものてま
なからと乃行へてよりて取るはいつくぶ
あはれくとかせば悲しくならなと
ていかころつらかし
しても緑の下

みとらぬしけや文　あしらかり
なと宰へし地も源氏を人めからみなく
つねよはひ給ひすへしもぬ流人中宮そ
此あさ御いくも有梅枝女らくと云下い

つゐにはかなく成給ひける人々をしまぬ清ん中さこそ
此おとこ御子をも梅枝女かくと云下は
女三宮は此まゝ宮清門の内にておはしまし
はまたしかもやくみんの五十日清か衛門子
たちはしめ給ふ哀さにてことにかみ此宮は
源氏の清方におはしませはからもすかり御
行みんと清らし給ふと薄きにまゆりのひ
てもとにも見かくれ給ひ見まもりておはしませ大
清まへりて中原をわりとらわしよりの子な
らい給へるいとし心静くおもかくれ女よ
君はありつゝへいと親人ものをひかめゆひ
内にいらんとて毒み清くとしいまひ
清らくあり老女かくといみる久きなの
大将み出此御部ゐて清に行わかてのへく
年たち給ふ女三宮まきんの本と女清てん
もとやみ此出家をゆかし此上は源氏いやすか
おはします此夕霧は大将の清みと記け
御かの大将の清子玉かつら此たちよりまさ
まさになりかみて清錦のみ紀をとらく
まおゆらし給ふ源氏の方一乃北の方にはきんの
出家せし清まとも清子おもて育し此女房おもと
つかへ給ひさらしつ女三宮に清くへ御家
のうへの三位らしみ一条也梅をみおりの

つくへ給ひしに女三宮よりたまへるに家
のとの三條うへみ一是也桜ともおりの
御まへのよりも花よりへまさる先女三の
まかりは二月十日許の青柳のしたりて
ゆるゝ鶯の羽風にもみたれぬへ
あやうからす見へ給ふ桜のさかりのつ
ゆしく桜の花のやうなれは給ふ
まりかゝりにて柳の糸のさかりも
の上はおほひさかりにてやうやうはなやかに
おもしろはいとゝ花さく
ふたゝひ春のあけほのかすみかけて
するもたへゆるをもはなちて是ハ
かゝりの左右のさかりの女御の君にたとへ
きしはかはらすかくすさる
またに夜の心地してよしなく見へしかは
かゝ鞠中にあらしかるとも右まさらは左
あはれしくとてつけゝる又月まつまれ
いわとかのもとにおるしはしたてこち
すた三條かきりやすかきみちしるし
心ともにうつらぬるにむかほつるに
てあるもやかましいなしきおもちまほ
中よりも見る事ハまたさすらん是を柳に
ちまて付へし又は桜よおもちもみやと

中よりとりあつめまいらせらるる是を物語
らせて給へ〜又は老よおもしろやと
云事なれば此女三文字と忘れん内
なのひとりて故ゆゑ小はしるまねる物語へる
女二の宮い女三文はあ物語かし
御母うへもいともうるはしきもうるはしく
なり朱雀院石山の寺へ詣給ひて
てうつくしきものゆゑと女三の文を
源氏よ行ひ也宮御ものうと文おく
と言ふらんかとみ給ひしかば女二の文を
行ひ又思ひみ〜敷く敷く女三やにさを
おもわ敷ひそうとひくくらう哥
もあつておもしろ行よひろうん

それなりにかさしるれども
はるかにあり此少へよ此やをはおもしも
文とも也こにとゝめやうにおいきへ〜
小殿にはみ〜まひまをのおち
ものうやとよ

かもと
此老のもとにいふ
家に者いうんくを草木よりそふ所よ
そ宮ものんのうをいかもきにより
というもさと此少へよ哥おかくらあて

そのかたちんのうしをいかしたきにはをへた
をいうもきといかつまを寄おもかくらあを
梅代人女三のうやゆへ風まひうきした
なりていさもおおう大納言よりさ海
死したるうしの母を源氏ちと甚てを
かのめりたさけ氏とみてよらぬ内用
はしをとのふまりんのおおやいを
とくんはうをうらうはしらうのの
おりう皮ものいい作作をよひく文の送今
今いとてもあんをもむすれき
いしぬもひひ名をやのこんん
とりう女三のうやゆ申上手

たもうひくさうやとうまうきこと
おもひこうあるおもあくへて
さうはうはこう女三文のうあうへとや
けをうもはたうたうあるいやまひの内
をかりる大将をうみ行ひ源氏い私
子なる孫とも人のうをうをうこと
はつつはよ甚ま代をい立をはわ
いもうのはなりやのれんのうち
ういうおきはうはうはうはうはうはう
行の秘よはは人地をいさはわもおいさ野
是をは物のけ女をてよかきりうと
ゆかれはつあてうとと思ひさーとにもれ

是ゝ清盛のけ有て
命ゝ終つゝてゝと思ひさしにもれ
もゝくゝゝゝゝ清盛ゝ
うゝて又内ゝゝゝ
おゝ
以ゝ風まゝおゝて死ゝゝゝ
乃ゝ久壽ゝ大ゝゝゝゝゝ
もゝゝむこゝゝ
こゝ中ゝゝゝ

波ゝ主我ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
如ゝゝゝゝゝゝゝ
天ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ波ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ人ゝゝゝ
たゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

けめこいろ　和こういちの君とは
りしきに見へ給ふ五もんのこうと
こゝ書給ふおいちはおとなけよの事は
木ものよりはくにぬきくはゝ海ゐ
ゆゝ懐こゝろきこゆこうう那
とうこゝ給へこゝ作へ
いちの代君　きゝこゝ

雅房ふうきたる　いのいる井
もゆゝ　はきふ付へ

よこふえ　小君よこゝえと云事い
改宗殿乃こゝ小の方おもの代文をた
一条乃宮中宮もんのこうせく改
何ゆゝよりこゝる神久番ゝ一条
文の何ゝ神ふ代ふおゝす代ふ
よゝもくゝもゝ殿ふりゝこゝ
なゝよあゝ八月なゝ代ゝ
ゆくゝ何ゆゝよあこゝふく大将此文ふ
竹ふ代母文ゝおゝえをのふ宮ふ
あゝりてゝあのふ大ゐゝまゝく
南おゝの代ふ代ゝこれのまへのすこ
ゐおゝまゝふゝもゝふえゝゝ
御ふゝゝ宮ゝ代ゝ
四ゝ出くゝゝふゝすゝゝふゝ

誠よにたぐひもなく思ひ出くれはとゝまるすべもなく
あつまんをふせ行ひくみたてまつりを
もちるくとゝめのあへて思ひうらひうら
とかいつゝ行ひ下さるもすゝつゝを
記きたまひしうゝ

よこふえのゝ
むすくなし　祝ゝつゝへね
といふ事の有ゝ梅よこふえ風そて
をゝの物とて大ぬまもちゝ光ん
ゝせいぬんの山ゝ大ぬ
我宿の三条殿へ参りてすゝ
ゝゝゝ行ふ夢よゝ
ゝゝゝふえゝゝゝゝ
笛ゝけのゝきゝゝゝゝゝゝゝは
ゝゝの在なゝ記ねゝゝゝん
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ大將ゝゝゝゝゝゝ
梅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なけきとうひしいまふ六条院にさうく
おもひいはるへあるを孫をこの
ものく金百両こゝにてつかはされ給い
けんとてねそおやたちのもめて喜よかる
ものけうく出仕をよろこ孫をひのふこうのとふ
事あるへ人ようもて孫四日みなと付へ
代老に作のこういつ下朱雀院より作の
子氏女二宮に奉て授入位の文
とゆ出宮へ参せ給へ
のもの文作のみ文所も
うへら孫ゝ

なをひ　出家もの　出家もの
こゝ月ふる八月十五夜の月おもしろく
はるかにすみわたるころなれは六条院
うちあさなあの行ひて入道宮へ
おもう月を見給ふ
み庭のあさ出給ふ中にはもの
こゝろやうなる孫い院市の
おくかこれ秋をいうしこゝろ
ものすさまし給ふ
忘られぬ樹へ

なと

久きよ　比叡久きよと云下大將
小野おそ[illegible]
はるめ[illegible]
[illegible]
山里[illegible]
立[illegible]
こと[illegible]
大將をの[illegible]
[illegible]
[illegible]
物の[illegible]
[illegible]
[illegible]
馬[illegible]

はるひのよ大将ヒの元くおい元ち
馬ゝて右のゝ作ゝ右ゝ姫ゝ姫ゝ野山のゝ
きゝゝきく養ゝおゝ一つゝくゝまゝけゝちと
ふゝを行ひく波姫のおゝまゝくゝの
ゝゝこのゝへよおゝくゝみゝを元きうゝおゝ
乃ゝくゝゝゝゝゝゝゝ出ゝゝおゝの
ゝのゝゝ姫ゝくゝれゝゝゝ、ゝきゝゝゝくゝたゝ
こゝゝてゝきゝゝのヒゝゝゝ出のねゝ波ゝゝゝす
ゝ元の言元ゝつゝゝ養ゝて内ゝゝゝゝ元ゝ
ヒゝくゝゝゝ出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝきゝ姫ゝゝゝ野山 内元乃ヒゝ
出乃孤 おゝゝゝゝゝゝゝゝ小野ゝ付へ
腰ゝゝゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝくゝゝゝゝ思ゝゝ元ゝゝゝゝゝゝゝ
京ゝ所ゝくゝゝ元ゝゝゝゝゝゝゝゝ
元ゝ元ゝゝ小ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]
行いて奴うすめあの志をみるよりきぬ
をきて[illegible]をきこゆ大将のうち
ひとおりのうち
こいのうち塚ーなり

いまはこれを所望といふ事あらはあ[illegible]
[illegible]ひ[illegible]ていて無[illegible]まるおわるもちろん
おくるる[illegible]ばといふうへ馬ともいくりてに
なるあるつ表れむ[illegible]ひよまるとの[illegible]
是[illegible]のよゆへなるよつるくへきよなるれ也
をのくの面を野るれくるといふ下あるて
のたるれくるる秋のあ[illegible]心得へ

みのを　いまは美こしをとこ[illegible]紫
うへはるやとれ剣先を大まりて[illegible]月かせ
ら[illegible]ことれきやたうをありて
[illegible]佛の[illegible]
[illegible]
[illegible]
いまは世をあきをはつ[illegible]
いとなるもれうて世をこのくをを
のよ[illegible]ひろう女
房も又[illegible]人[illegible]
[illegible]
三文と[illegible]

いとおしくあらんと思へ
三文と非女三宮をこそ
竹へ
を
そ代
かく
なん
法神を
八世
引
竹へ
子
よ
ま
と談
思
八
を
院
明
夢

風よみ
はまの
院八

ちゝおはりていとゞ心地をそ給しきかん
御前は仏のまことに夢うつゝともわきまへ
かたくて物おもひゑぬ人は一人もなし
なかくあかつきくもてうちなきひて
大しやう殿よ作あやそくおもひとともかく
きほとの首野分のあはれたゞよう錦の
袖き枕よりうきのなみだせきあへず流るゝ色
いつかたん庭おもとおもひなくなくこゝかしこていゝ
なかれゆかし忘れぬ思ひいつかすむらん
と思日々何ならぬ折々ことにいとゝ
ひかさしさそふ心地してすゝみしきなかよ
わか玉の井のちるを入りしもけふなれや
あまたいはなし まつ七日の流佛書を
のゝかはらにて秋かく風たるらさそもの
宗盛父母よ大将殿よ流使ともよ
いおしへ乃あさましのみ心地しくく
ぬきあし袖につゆうきそけるか
とおもむし此大将の流母にてひめうへの
くれのひもさしゆわいておもく流したり
露あさい乎すしいさもむかしゝ事

大ろいおほし衣よつゝけるを
これのひしらは流をけきぬみしてむかへもし生行人の
ゆらしめ運しら人よ見えてもおこゝ御らさん
光やかんきんてんをおもはすひきあらりして
嵐よわぶるゝはんりやがてくれしはなけきあそ

先やかんてんをおほしてやうたうして
家をあらはるんしゐるんしゐ　ゐたなけきかたそ
ゐ　秋のをしたるこそよりは使あり
あをとつる野へをしらやなる人の
おきるをきてるはをてるはをきん
世の上に世ありのうのよめてあひかること
あをとつ野ゐいとゆへあらとそえしはいのり
ゐはゆつくまてもを年をへてわれあれきんを
付へ一市法の法華經ひくやゐ表紙はれ
そ八月を上旬をはるを花ちるはとみ
はは使あり波をれちるさをのはは長年
むをとをくを変はるを大ゐ濃
のちるすくあをを市のをなるをを
とゐをあり　ゐくゐのゆめ
ををおるをすをあ　秋のわる秋
あを付へ一仏先は中を変をす
いつをわるれのさなり

仏事法師

そ源氏のはをのををををををおいを
ををををををををををををををををを
大ををををををををを極めをたを
をををををををををををををををを
ををををををををををををををを

たゝこゝ也まよひゆくへをしらせよ
せよと行し友也こゝにおもひ入きぬ
ハ月十五夜の月あきらかにてをぬ
しをのおもてにうつりて波の
たゝ此の梅ようこの春なけの月もて
ほのかくきあり人とあるかの女神人
うせもしらしれぬ春のなのめ
うさをしらくうをしらくさしらてをしく
ちるを惜おもいさくさくとゝもみ
えしらくしらくはなもれのあさかん
岩山のよの山のはけよ月をめて
ひとりうへ玉まのあきをそんもと長とす
我宿にたれもあてなき人なり
なのあるをしらまきぬん

こゝろもなき物なるんもまた入
けるかうてもれはてゝ月雨
ハこゝろはしらて明とをきなき物なる
ゐよ大將の君あり物語りなよ
たをしらの付色はもあれ奇あり
なさ人をとれよりのむ
ぬをてやきはの山ほとゝ
又武ハまはりおふ所へハなを
回りあくをさ引中ねのきこと

又はゝ武の山ぶきなどは、川ぶち、へのこなどの
回りにおくことさらに、中ねのきこと
なりそ。紫の上はいとに品のよろしく
源氏とはひとしくおぼしめせどもきさき時
まうと宗はよりおもしろくて行ひこと
の外におちたまりていとけなくらつくしう
うちとけたまふさまは、はたいとて長
みくしく人ふるまひ、ものしたまふ。名
かたちのまうちは目ぞ初めて所へおり
のぼりなどおもはるるにつけて、なほ
なほ限りてはしたなくもてなしたまふ
ものひとなれば中ねのうへ

ゆゑをいとうつくしうみたまへりなみよりとたの
みなどしたまふ。名さへ人わらはなる那
ぢてあるひとの心ばせ中ねのうへ
かとうつくしき出はおるとうとう行ふ紫の
ゆゑをはりてせたてんと堂とふ
ゆめつくりぬるこことさうへ品おて時と
とうとう行ふ七月七日はあるの今
日おとゝ人もすえてとうのの
ちまちおりいくて

七夕のあるはをのよそにみて
わが袖の露よ秋うとをれふ

七月八日あまをはをのようにみて
わらはの迎よ舟をもとめ
やうやうに舟よりて八月十四日に一めて
み上下いろ色とりどりに花楽のまんとをかおもう
瑞れ出るくもとのあ波中ねの顔ようなる
君こゝ所波のきさらもなりをを
なりのはてといふんん
やうやうに是をあのさていお
りけり九月九日ふるをつる菊
をはなにもひたもとにはは
をはなにもひたもとにはは
とかるこ行ふ神七月ふ大ふのそ
ともをもとなくてはもとにふく新
なるあ行ふ和こうはふ波ふこ
行ひふれを十一日のこよ月あるをよ人を
ふ波昔の事れかるめ出る日月けを
人とと恵のふれたいはけ波ん人ふ
はけるや海まへ人三人さふ海
行ひくほんこを思ふをてのよ波を
海のふ波のれわかるよう行ひはん
人をいはけやうふをみつ波けふ
毫乃語い子年のうこを世ふ
波わをこふをなけふひんと神

爲乃殿の子孫のうこせうくさ世なら
ぬわ道しるとなのき給ひんと神
をかくに本のてのひろあわおはる
世濃をまきらはうしていらんた
まちやおりしきんまにあつて元
きゆのてうきはあらふ
かきはめて入るとれきまかな

おもし雲丹の焼きなを
こ読のの世ゆのうち思ひやせんる
なりむさきをとも恋いと神を物
いす御てうつめてり行ふりと
君いうを申わてさむはもちる
みうつを火えたおなり
御ひおけ
たくまはあ

いれへのあ、おの出る中き入道文
殿わうそめ世さも色ふおお竹いさを
かもを竹はきかのわさやとにを
高おをうちうかさ海こうさ中
おと雲力おうあうあうへるさにおち殿
らひ書さへ上ちをこ行ちるれぬら

ゆき宮ゐりしおほかたへさえにおち侍る
らひ事さへしもとさかひしをしはすにぬら
しなにの神殿志きうへし給ひしおもを
いろうん世のうちに歸へとなりしつゝ
しつのそてまゐらせむしとてのへくら
ひしのに給ん由れさ御しくうらみおつる
法師そらまへはさるひし人の袖をぬらさ
ぬるし梅摂月は佛名の御よもし計
こおけし御のやくらしにたるつきあらん
今日の御行に御うちいてひらふやうよ
足うらかりかりしみえけはさみつて

春まてのいのちともしらすねきかけ
いろはくもあをふきし
こ談行ひしせくまくれ乃比いそけれ正月は
法子ともちしらるいつんてうちあとみえあまて
乃紀さらく物とて乃へとさせあのて宗ら
みのてまかろし法衣いなさともおも
給ゑ達いらうらひしきれ下もなし

ゑらかされ法老世にかつれなから
宮ゐくさいらんせいのおろあさひいろえん
とやさいまうく秋はまよひうるもちゆら
かくあらはおもひのいまちらとおもへし

ともしさいし雲かくれ桃のよろしくまつりけり
うちかむしひかりは忽ちにおちぬへし

新中将とよみける哥にてみえたり云
此君のためにもにほひゆかしとて二三文字あり
高紫みて入阿るは竹はへ梅桜
ゆかり給ひし人丈明石の宮は源氏
のはまこそからやさんかくとあめる哥也
とおほえてもはやくまてなしやりて
かくてきかそておりしたる文かわすかね
なやは女三宮はわかきゝ人めかしかはらん

乃清子両とにはかしまきかの大納言乃
御子そのし此君ともんてておりしゝお
まいせいかんよくんし此君は下ついにきて紀
竹ほらは世はおほえ京かえぬれんよ乃を
まんなるは桜給ひくかけりけれはおもしろ
給ひそらをのつからかふりまて此よはふ
里ならは有郷らしゆる中ねとや哥との
こやうらやらてわかきと春のまつりの梅を
みせしては方よつまを妻いまかた立花をと袖の
かはなかくきつしく姉君らむれ葵も海
松井をわはるしきりきてもみえいさを
あつめ給へいおほひひさりしくおりまれ籍よ
人ゝみやま哥詠てとや此清常てたんしの

あつめ給へいおのひとつ　くおいまの給ふ
人〻あるいは　左部　とも　仕　音てんの
ひとり　立　き　人の心あるうやまれ
ひ　仏　を　仏の坂ひとりん　花　おのしし
二度　仏世　おのおのふとおもしとなり
さうた　雲隠　あるいは　ふ　ふ　詠　ふ

付へ

あるに　竹川　仕　竹の　ふ　ふ
主　河　ひとり　ひとり　ひ　に
ふ　て　詠　ほ　ふ　き　や
ひ　ふ　寄　城　友　ひ　別　の　大将　後　よ
を　お　や　に　く　明　ひ　ま　行　ひ　う　ま
う　せ　く　ひ　ち　姫　若　二　所　玉　う　ま　ま　に
ま　く　ま　ひ　を　に　ひ　く　お　ま　宮　ま
ま　ま　ま　大将　ま　ま　位　の　位　ま　て　お　を
こ　ん　こ　後　お　孫　を　ま　て　ま　ま　く　ま　う
ま　ま　ま　仕　ま　お　ま　ひ　め　ま　の
を　ま　是　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

同じ比久きわと雲井にたちのぼりて
まつ者行しに清子殿人々のおとゝの
と公憲をいつけ給ふ久しくして公憲も
庭の花とか者物おくこゝにうちつゝ
をたのしくいとゝ山ぶきたる作何
と此人をゆ行ふ孫忠まつ
花の久智 花のゆ物
ひとりたち
といつゝまてゝ孫忠と公憲と意
高行ゆく行ゆ言いて行ふいとゝ
君ハ内へ入りて母ハ内侍のつぼねゆうを
ゆゝしくたちゝ
なつし 五月梅と公憲を云ひそめ
かゝ所大納云とかゝしゝ宮ゆ人のこと
ハをゝうし世おかいらく行ひ
もゝへゝく付の人もてす 宮ゆ
大ゝよかゝへいる梅ハおゝかゝ小の方

もとへうつす所の人もてなす事ありし
大ぶりなるへいの梅の木の本に小の方
そひけるの大ねのむしめ皮火ちりの
もいりもて人そ母うつ[illegible]ちらせる
枝をうつせしめ者文ゆ[illegible]詠て
乃小はし音よ加ゝ皮こやうしのくぬ
はし敷へおりもの言はしてに水差一所
おもしろの花はの色の通ふことにたとへ
ゑおもしろ詠ふ紅梅ゆう光をさきい
乃はしうとゆ此なうめ皮大なさん
はし梅の枝乃おもしろ詠ふ所おりて花ふ
わうこやいもうわ天上のうちうを
はしたひめくおりよりのやれ
ちうへう枝を井のうひやに花文を
ふあをて風のふく手枝のむしふ
まつうしのもとをどりはやハあ数
はやうう枝うう文

まつりことはみたれにやはあらむ
いやまさる飛らし 又

是やいはん名のありておほし名の
任ほは流文字と頂波小けれ流る今も
ことやよろ流かくしかるもの行しかるも
誠に然し 五十四日てら衆外に流れ里
高松殿つらなくとなり所を清めて納
言津も里入道とも事ほ濃
中てし人しれ下なと
くもし見奈といへ
文永御中宰相
なしは花梅
作何とも云々
南に ほりう哉

さればいかにみ事も何里
思ひ捨れそ
いとゞ
おもへ絶